

ハイスクールD×D 仮 面魔法伝 派生世界

からおお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった青年が別世界で蘇り、仮面ライダーウィザードの力と秘めたる力を得る

そこは人間だけでなく、悪魔、堕天使、天使が存在する世界だった。

注意事項

ハイスクールD?Dと仮面ライダーウィザードのクロスオーバーです。

原作とは色々違うところはあると思います。また拙い文章力であることをあらかじめ、言っておきます。

なお誹謗中傷は受けつけていません。

また、この作品は本編としているハイスクールD×D 仮面魔法伝の派生作品です。

大変お手数ですが本編の8話までを見ていただいた上でこの作品をお読みください。

本編↓<https://syosetu.org/novel/151359/>

それらを理解した上でご覧ください。

目次

戦闘校舎のフェニックス編

第9話 中盤

1

戦闘校舎のフェニックス編

第9話 中盤

「なっ!!はるとおー!!!」

「!!!春人……先輩……!!!」

『春人が?春人がどうしたの!!!イッセー!!』

「撃破(テイク)」

すると、上空から声がした。

見ると上空には、ライザーのクイーン、ユーベルーナがいた。

「うふふふ。」

「よくも!!春人を!!!あいつは人間なんだぞ!!!」

「ゲーム中の死亡は事故として見なされるのよ。」

その言葉にトサカに來たのかイッセーは神器を、小猫ちゃんも戦闘態勢へと入った。

「降りて来やがれ!!!俺がぶっ倒してやる!!!」

「うるさい坊やね。次は貴方達を吹き飛ばしてあげるわ!!!」

その時っ!

「そんな技で僕を倒そうと思ったら大間違いだよ！」

「!!!」

爆風が晴れ、傷一つついていなく、フレイムドラゴン状態のいつも通りの春人の姿があった。

「あくそれにしてもびつくりした。」

「春人!!!」「春人先輩!!!」

「ん?どうしたの?」

「先輩……大丈夫なんですか…?」

小猫ちゃんが恐る恐る聞くと僕は

「大丈夫だよ」

笑顔で返した。というか分かんないか。仮面に隠れてるから

「ば……バカな……中心を狙った筈なのに……」

ユーベルーナに気づいたのか僕は見上げると

「今の爆発ってあんたの仕業か。なんならこいつでケリをつけようか」

「くっ!!人間ごときが!!」

その時

「あらあら〜春人さん。無事ですか」

「朱乃さん!」

僕とユーベルーナの間に朱乃さんが降り立った。どうやら魔力が回復したようだ。

「春人さん、ここは私に任せて、お行きなさい。」

「ん? その様子だと魔力が回復したようですね。」

そういった途端、朱乃さんの体から大量の魔力が溢れ出し朱乃さんの体を包んだ。

「はい。この通り、魔力は十分に回復しましたわ。心配いりません」

「わかりました! ならこれお守りです。」

僕は朱乃さんに赤色のリングを渡す。

「これは?」

「僕の魔力を封じた魔宝石のリングです。」

「ありがとうございます!」

そして僕は運動場へと向かった。

「おい!! 待てよ!! 春人!!」

そしてイツセーと小猫ちゃんも後を追った。

そして、皆がいなくなると

「貴方とは一度戦ってみたかったのよ【雷の巫女】さん」

「あらあらそれは光栄に存じますわ。【爆弾王妃】ボム・クイーン」春人さんに触れるこ

とは万死に値しますわ!」

クイーン同士の戦いが始まった。

朱乃さんと別れた僕達はグラウンドへと向かっていった。
すると、

『ライザー様のポーン三名リタイア』

別行動をしていた裕斗が誘い出した三名を撃破したのだ。その直後に裕斗が現れ、僕達と合流を果たした。

「裕斗!! その様子だと作戦成功だね!」

「うん。朱乃さんが結界を張ってくれたお陰で何とか、それに君がくれた飛天御剣流が役に立ったよ。」

僕と裕斗と話しているとリアスからの通信が入った。

『小猫! イッセー! 聞こえる!?! 春人は無事なの!?!』

「大丈夫ですよ。部長! 今、裕斗と合流したんで!」

『ふう……よかった……それじゃあ次の作戦について説明するわね。私達はこの後本陣に奇襲をかけるわ。だから、できる限り敵を引きつけて時間を稼いでちょうだい。朱乃の回復を待つて各個撃破しようと考えてたけど、敵が直接クイーンをぶつけてきたのが計算外だったわ』

「!!しかし部長!キングが本陣を出るのはリスクが大きすぎますよ!」

『敵だつてそう思うでしょう。そこが狙い目よ…!いくら不死身だからといって心まで不死身ではないわ。この私が直接、ライザーの心をへし折つてやるわ…!!』

「分かりました!!」「了解です」「はい…」「は…い」

通信を終えると、4人はグラウンドへとたどり着いた。

「!!複数の敵の気配を感じます…」

小猫ちゃんが気配を感じ取つた後、イツセーが前へ踏み出した。そして、

「おい!!隠れてることに気づいてんだ!!さっさと出て来やがれ!!」

叫びだし、敵を挑発したのだ。

その時、砂嵐が吹き荒れ、その中から装甲をまとつた女性が現れた。

「私はライザー様に仕えるナイト!!カーラマインだ!!」

ナイトと聞いた瞬間裕斗は自ら前へと出た。

「僕はリアス様に仕えるナイト木場裕斗、ナイト同士との闘い…待ち望んでいたよ!」

「よくぞ言つた!!リアス・グレモリーのナイトよ!!」

裕斗は相手のナイトと戦闘を開始した。

「や…ヤベエ…!!こりやあ…俺の出番ないんじゃあ…」

「そうとも限らんぞ」

「!!」

「カーラマインったら、頭の中まで剣、剣、剣、どうめつくされてますわ…」

辺りを見回すと僕、イツセー、小猫ちゃん、小猫ちゃんは5人の駒に囲まれていた。

「なるほど、残りの駒を全部投入…部長の勘は当たったな」

「呑気に言ってる場合か!!ブーステッドギア!!」

「5人だと…不利…春人先輩、さっきのあれはできますか?」

「いやドラコタイマーを再発動には時間が。こんなことならさっき使うんじゃないかな?」

と言いながら僕はイツセーと小猫ちゃん達とともに戦闘態勢に入り戦闘を開始しようとしたが

「あら、ゴメンあそばせ♪私は戦いませんの」

「は?!」

突然の言葉にイツセーが動揺していると

「私はライザー様に仕えるルーク、イザベラだ。ではいくぞ。リアス、グレモリーのポーンよ!!」

仮面をつけた女性が現れ、軽い自己紹介を済ませるとイツセーに殴りかかった。

「のわっ!!おい!!何なんだよ!!アイツ!!闘わないとかどういう事だよ!!」

「ビショップとして参加はしているが、ほとんど観戦しているだけだ。彼女は…いえ、あの方はレイヴェル・フェニックス!!ライザー様の実の妹君なのだ!!本人曰く:『ほら、妹萌えて言うの?こう言う奴、まあ俺は妹萌えじゃないからなく。形として眷属悪魔つてことで』なのだそうだ」

「へえ〜それで、妹をねえ〜イツセーも変態だが、ライザーと良い勝負じゃないか。」

「うるせえ!春人!あんな焼き鳥と一緒にするんじゃないねー!」

「ニイ!!リイ!!やつておしまいなさい!!」

「ニヤニヤん!!」

そう言うレイヴェルは僕の前に露出した制服を着こなし猫耳をつけた2人の少女が立ちふさがった。

「春人先輩…やらせてください…」

「ん?いいけどやけに今日は戦いたがるね」

「はい…何故か私と戦うほとんどが胸が豊かですから…ムカつくんですよね…!!!」

そして、小猫は殺意丸出しにすると2人のポーンめがけて殴りかかった。

「えい…!!!」

「ニヤ!!?なんかこいつ怖いにや!!!」

「私達何かしたかニヤン!?!」

避けたもののあとのナイトとビショップは吹き飛ばされてしまった。

『ライザー様の騎士一名、僧侶一名、リタイア』

「な!!! シーリス!! 美南風!! くっ!」

「さあどうする? ん?」

2人の駒を撃破したがは何かを感じ取った。

(朱乃さんの気が弱い…苦戦してるのか?)

「ちよつと貴方!! 今のはなんです…」

ドンツ!!! きやつ!!!

僕はすぐさまグラウンドを飛び去っていった。

朱乃 side

グラウンドで僕達が戦闘を繰り返している中、私は苦戦を用いられていた。

「ハア……ハア……ハア……」

「やはり、噂通りの力ですね。やはりこれがなければ」

「く……それは…フェニックスの…涙ですか…」

「ええ。これのお陰で私は貴方に勝つことが出来ますからね。貴方との勝負は面白かったですよ」

そう言うユーベルーナは魔方陣を展開した。

さか!!爆風よりも早く移動した!?)」

朱乃 side out

ユーベルーナがいきなり現れた僕に驚いているが本人は無視し、僕は朱乃さんを少し離れた場所におろした。

「大丈夫ですか?朱乃さん?」

「はい…ですが…どうやってここまで…」

「いや、グラウンドで他の奴らの相手してたら急に朱乃さんが苦戦し始めてるのを感じたもんでさ魔力があまり残ってないですね。」

「はい…クイーンとの戦いで使い果たしてしまいましたわ…ゴメンなさい…力になれなくて……」

「いや。こちらこそ助かりました。あとは僕たちがやりますから朱乃さんは休んでてください。」

「……はい……ありがとうございます……」

そう言い終わると朱乃さんは消え、リタイアとなった。

『リアス様の女王一名リタイア』

そんな中、ユーベルーナは後ろで魔方陣を展開させていた。

「少々油断してました。今度こそあなたをリタイアさせてあげますわよ!!!」

